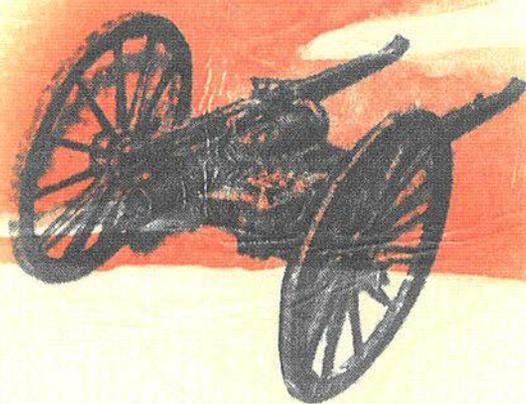


アームストロング砲の佐賀藩が対戦した
彼我のあらゆる戦闘記録を広く収集し、
事件別に比較対照。これまでとは別の角
度から戊辰戦の実態に迫る、必備の文献。

限定三百部復刻

佐賀藩戊辰戦史



マツノ書店

佐賀藩戊辰戦史目次

凡例

序章

佐賀藩の軍制と軍備の近代化

佐賀藩の軍制

佐賀藩軍備の近代化

戊辰戦役中に使用されたおもな火器

佐賀藩の動員兵数

第一章 佐賀藩主の横浜赴任と上野彰義隊戦争

藩主上京までの情勢

藩主の上京と佐賀藩兵の装備

佐賀兵、北陸道先鋒を命ぜらる

鹿島藩主の帰国問題

佐賀藩海軍の東征

江戸開城交渉と島義勇

佐賀藩主、横浜に赴任す

幕府軍艦の引渡しと佐賀藩

島義勇の房総鎮定策

佐賀兵、野州へ転進す①

江藤新平の時局建白

彰義隊の結成と佐賀藩士殺害事件

大隈重信と二十五万両

上野彰義隊攻撃戦

第二章 会津戦争

佐賀藩兵、野州へ転進す②

多久兵の到着

藤原口の戦闘①

藤原口の戦闘②

佐賀兵、白河口へ進む

藤原口の戦闘③

白河口の佐賀兵、若松城下に達す

若松城包囲戦

日光口の戦闘

イ・日光口佐賀兵の進発

ロ・横川・大内の戦闘

ハ・日玉峠の戦闘

ニ・栃沢・関山の戦闘

若松南郊の戦闘

越後口官軍の若松到着

若松城総攻撃

会津藩の降伏

会津戦争の終結

第三章 羽州戦争

九条総督の仙台到着と奥羽の情勢

佐賀兵、九条総督の救出に向かう

佐賀兵、仙台に入る

前山清一郎の仙台脱出策

佐賀兵、九条総督を擁して盛岡に至る

九条・沢両総督、秋田に会軍す

沢副総督の転戦

孟春丸の座礁

岩倉具視の出征計画と副島種臣

官軍の庄内進攻計画

院内口の戦闘①及位・金山・銀山口付近の戦闘

院内口の戦闘②舟形付近の戦闘

小砂川の戦闘①

イ・三崎峠付近の戦闘①

ロ・三崎峠付近の戦闘②

ハ・三崎峠付近の戦闘③

院内口の戦闘③新庄落城

院内口の戦闘④塩根坂峠の失陥

院内口の戦闘⑤官軍横堀へ退守す

小砂川口の戦闘②塩越付近の戦闘

武雄兵の到着

小砂川口の戦闘日③

平沢・三森付近の戦闘と本荘の放棄

副島種臣と東北遊撃軍ならびに長崎振遠隊

院内口の戦闘⑥皆瀬川付近の戦闘

院内口の官軍、大曲・神宮寺へ転進す

院内口の戦闘⑦

角間川・追分付近の戦闘

小砂川口の戦闘④長浜付近の戦闘

小砂川口の戦闘⑤勝手付近の戦闘

十二所口の戦闘①盛岡兵の侵攻と醍醐・前山の弘前派遣

小城兵の到着

十二所口の戦闘②小繫・今泉付近の戦闘

十二所口の戦闘③前山・坊沢付近の戦闘

十二所口の戦闘④岩瀬・餅田付近の戦闘

十二所口の戦闘⑤大館奪回戦

十二所口の戦闘⑥十二所付近の戦闘

十二所口の戦闘⑦雪沢・水沢付近の戦闘

十二所口の戦闘⑧

十二所・霧の森・水沢付近の戦闘

十二所口の戦闘⑨

水沢口の夜襲戦と三哲山奪回戦

盛岡藩の降伏

野辺地の戦闘

九月上旬の奥羽の概況

小砂川口の戦闘⑥糠塚山・椿台付近の戦闘

小砂川口の戦闘⑦豊巻・長浜付近の戦闘

庄内軍の総退却

亀田進撃

小砂川口の戦闘⑧三崎峠・大師堂付近の戦闘

奥羽の平定

■付記・あとがき・年表・参考文献

(目次では割愛しましたが、項目毎に日付あり)

佐賀藩戊辰史の名著『佐賀藩戊辰戦史』を推薦する

戦史研究者 長南 政義

「薩長土肥」という言葉がある。幕末期に雄藩として明治維新を推進し、明治新政府に人材を供給した薩摩藩、長州藩、土佐藩および肥前藩の総称であるが、薩長土肥という言葉はその順序で新政府内の影響力の大きさをあらわしている。佐賀藩は、精錬方という科学技術研究機関を創設して大砲や蒸気機関などの研究開発を行ったり、軍制改革に着手したりするなど、日本有数の軍事力と技術力を誇ったが、中央政局に対しては姿勢を明確にすることなく、ぎりぎりの時期まで静観を続けた。また、藩士にも他藩士との交流を禁じ鎖国藩と呼ばれるなど、他の三藩と比較して幕末期の貢献度が低かった。

これが影響してか、佐賀藩の幕末維新を記述した良質な史書は、薩長土三藩と比較して少ない。薩摩藩には勝田孫弥による『西郷隆盛伝』や『大久保利通伝』、長州藩には末松謙澄編『防長回天史』、土佐藩には瑞山会編『維新土佐勤王史』といった優れた史書が複数刊行されているが、佐賀藩関係の維新史に関する大部的な史書で刊行されたものは久米邦武編述の『鍋島直正公伝』など少数にとどまる。

しかし、佐賀藩が戊辰戦争であげた軍功が小さかったわけではない。佐賀藩は上野戦争や羽州戦線などで活躍しているからである。特に、戦線が拡大するにつれ新政府軍は兵力不足に悩まされるようになるが、このとき脚光を浴びたのが佐賀藩の軍事力である。特に、佐賀藩兵が奥羽鎮撫総督府に増援され、九条道孝総督を救出し、庄内藩兵をはじめ仙台藩や米沢藩などの諸藩兵を牽制・敗走させた功績はもつと高く認知されてもよいはずであるが、奥羽戦線における佐賀藩の功績はあまり世に知られているとは言えない。

そして戊辰戦争における佐賀藩の功績を世に広めたいという動機の下に執筆され、戊辰戦争における佐賀藩の活躍を詳述しているのが、本書である。本書の特徴は以下の三点だ。

第一に、本書は、佐賀県立図書館所蔵の鍋島家文庫および多久市郷土資料館所蔵の多久家文書に収められている戦報や記録類を多数引用しながら、個々の戦闘における佐賀藩兵の行動を詳述している。

第二に、本書の記述は、個々の戦闘における佐賀藩兵の行動が、戦局全体にどのような影響を及ぼしたのかという点に重点が置かれている。つまり、著者は、佐賀藩兵の評価が、各戦闘における勝利への貢献度と同時に、その存在が新政府軍全体の中での程度の比重を占めていたのかという点からもなされるべきだと考えていたわけである。

第三に、執筆手法が史料原文を引用して記述を進めるスタイルであるため、内容が非常に客観的で、戦闘経過等に疑問がある個所でも各史料の異同をそのまま紹介し筆者の推測が控えられている点である。

ただ残念な点も存在する。佐賀藩海軍は旧幕府海軍に次いで優秀とされ、榎本武揚率いる旧幕府脱走艦隊との海戦においては、多数の佐賀藩出身者が活躍したのだが、本書においては紙幅の関係から割愛されているのがそれである。

佐賀藩といえば司馬遼太郎の小説『アームストロング砲』（講談社）で有名だ。司馬の小説により佐賀藩は上野戦争において世界でも先進的な大砲であるアームストロング砲を投入し、上野の山に立て籠もる彰義隊を

壊滅させるうえで大きな貢献を果たしたことはよく知られたエピソードであろう。本書では史料に基づきアームストロング砲の威力の大きさが次のように生々し描写で紹介されている。

「アームストロング鋼砲は口を開いて上野の森に発射し、その破裂弾は敵陣の中央に落ちて猛烈に爆破したりければ、山中の敵兵は何かは以てたまるべき、たちまち死屍は算を乱して縦横にたおれ、続いて少し方面を転じつつ発射せる二・三弾も、またことごとく震雷のひびきをなして落ちたりしかば、諸寺院は遂に火を發して、すさまじく炎上せり」。

さらに本書の良いところは、記述をただの史料引用で終わらせるようなことをせずに徹底な史料解釈を行い、史料の記述にある史的事実の誤りまで指摘している点にある。たとえば、『鍋島直正公伝』に江藤新平が鍋島直正に江戸で謁見し上野戦争においてアームストロング砲を使用することを薦めたとある点を、著者は「当時直正は京都に在った（年譜・公京都において痢を病み、容易に癒えず）ので、江藤は江戸に下る前に許可を得たものである」¹と、誤解を招きやすい記事である「などと指摘している」。

ところで、佐賀藩の戊辰戦史を語るうえで欠かせない重大事件に、下野国今市で発生した深堀又太郎殺害事件がある。この事件は、佐賀藩の支藩多久藩士の深堀が、軍議のために大沢宿へ出張した帰路、水無・森友間の杉並木街道で、敵軍の襲撃を受け殺害され、自身の首だけではなく軍議の書類という重要文書までも持ち去らわれてしまった事件である。この事件についても、本書では「中村純九郎手記」を使い凄惨な現場情景が紹介されている。

「深堀又太郎は大沢に屯営せる監物組と軍議をなし、その帰路、夜中、杉並切通し道において敵に狙撃せられ、首その他、軍議の書類・大小の刀など奪取せられ、首なしの遺骸のみ発見し、これを人夫に荷わしめ、帰營するに逢着せり」。

また、戊辰戦争中の佐賀藩は藩兵や旧幕府軍といった正規軍との戦闘だけではなくゲリラとの戦いをも強いられた。本書には賊徒探索や賊徒捕縛の記事が複数登場する。たとえば「賊徒等何時襲来候やも計り難く、これにより諸藩兵ならびに巡邏、尚又油断なく」²など、ゲリラ戦に直面して神経をすり減らすような緊張を強いられている描写は、戦場の実相をリアルに浮かび上がらせてくれる。

本書の著者である宮田幸太郎は、大正四年に佐賀県で生まれ、京都帝国大学を卒業し、戦後は長崎県立佐世保南高校などで教鞭をとった人物である。宮田の著書には、本書の他に、『佐賀の乱 その証言』³（佐賀の乱刊行会、一九七二年）や『佐賀藩戊辰戦史を記行する 宮古・函館の海戦と佐賀藩海軍』⁴（ふるさと社、一九七七年）などがある。著書からもわかるように、地元所在の史料に強い郷土史家であり、本書において地元佐賀に存在する多数の原史料が駆使されているのも彼のこつしたバックグラウンドと無関係ではない。

今回復刻される『佐賀藩戊辰戦史』は、戊辰戦史を研究する上で不可欠の史書であり、維新史研究者や幕末愛好家などの間で長年復刊がまたれていたものであるが、戦後刊行された書籍にもかかわらず古書流通量が少なく、古書店で見かけても高額で入手しにくい。今回の復刻を機会に多くの読者が本書を繙かれることを期待したい。

一二 若松城総攻撃

九月十日越後口軍が到着して兵力充分となった官軍は、総攻撃を実施することになり、九月十二日次のような攻撃命令を各隊に伝えた。

(若松城は正しくは鶴ヶ城とよぶべきであるが、ここでは分かり易く若松城とよぶことにする)。

一、明十三日、天気次第、城攻めにつき、午前八時集合の事。

一、日光口から進撃して来た部隊のうち約三百人は、河原口まで進むこと。但し、それより先きへは進撃無用の事。

一、諏訪社にいる敵は、大垣・長州・土佐兵が包囲して攻撃すること。

一、発砲は小田山上の砲声を合図に開始する事。但し、大砲一門につき弾薬は五十発ずつとする。

しかし、予定の十三日には雨が降ったので総攻撃は翌十四日に延期された。「岡山藩記」に、「今朝雨天につき、賊城攻撃の儀は取り止めに相成り候えども、明十四日、天気次第、一同進撃のはずに相きめ候」とあり、「牟田日記」には、

九月十三日 半雨半晴

一、暁七ツ時(午前四時)支度にて、明六ツ時(午前六時)進軍と相触れ候。宿陣所より六七丁出浮き、芸州待ち合せの談判にて、まかりいでおり候ところ、雨降り霧深く、山の大砲うちだしこれなく、若松本営より、雨天につき、天気次第、今日は一先ず延引に相成り候旨、申し来たり候。則ち帰営す。

イ、攻撃計画

「山内家記」は、「九月十四日、諸口の官軍ことごとく到着し、兵員十分たるを以て、いよく本日より大砲めをはじめ」と述べ、「岡山藩記」も、「賊城砲撃の御達しこれあり云々と、特に「砲撃」といつている。尤も、官軍本営からの攻撃命令は砲撃とは言っておらず、右の二藩以外の藩の戦報にも「攻撃」とあつて「砲撃」とは書かれていない。しかし、推察するに、官軍参謀部は火兵による攻城を主とし、できるだけ白兵攻撃を避ける方針であつたと思われる。

大砲隊

小田山(青木山または大窪山と書いたものもある)に次の諸藩の大砲隊が配置された。

佐賀藩大砲

四門

アームストロング砲(一門か二門か未詳)

四ポンド砲(砲数未詳)

「鍋島直大家記」には砲数は書かれていないが「伊藤祐徳手記(薩藩出軍戦状(□))以下伊藤手記と略称する」には砲四門とあり、いまこれに従う。

薩摩藩大砲

四斥半砲五門(伊藤手記)

大村藩大砲

二門(伊藤手記・砲種未詳)

松代藩大砲

メリケンライフル砲二門

四斥半砲一門(真田家記)

柳河藩大砲

「立花家記」に、「九月十五日、本藩の大砲隊、肥前・薩州一同、大砲にて日夜若松

■本書がいかにも多くの文献に当たっているかを知つて頂く連続五頁です。

■ここに入る二四三頁は作戦図のため次頁下段へ移しました。

城攻撃」とあるから、その位置は小田山で、十五日から参加したものと思われる。右のほか、「伊藤手記」によると、三日町口に薩摩藩大砲四門、六日町口に薩摩藩大砲三門、甲賀町口に薩摩藩大砲四門、六日町口に土佐藩大砲四門、中町橋口に福井藩大砲二門、諏訪通りに長州藩大砲二門が配置されている。また、各藩記を見ると、以上のほかに、佐賀藩大砲は日光口から進んだ部隊にも配属されており、大垣・宇都宮(二門)・館林(二門)・黒羽(二門)などの藩もそれぞれ大砲を以て攻撃している。「伊集院兼寛手記」には、「九月十五日、十六日、諸方の官軍と議し、砲五十門、一門五十発を約し、砲撃二昼夜」とある。

次に、各隊の攻撃目標であるが、これについて、山内家記(土佐藩)は、「先ず西南の外郭を奪い、然る後、次第に進撃に決議す。越後口の官兵は西方に配り、日光口よりする者(日光口軍)は南方よりし、両口の兵(が)西南外郭に迫り、戦いたけなわなるとき、長州・大垣の兵(が)直ちに融通寺・桂林寺の両口より進撃し、諏訪社の賊を(追ひ)払い、同時に外郭を奪うの軍議にて」と述べ、さらに、「このとき、我が(土佐藩の)守地である大町口より左、天寧寺口近傍は、外郭の塁壁ごとく官軍の有となると雖も、我が守地より右に回り、諏訪社より西南の塁壁は賊がなおこれを守り、なかならず諏訪社は最も要害の地にして、攻撃甚だ難く、賊もまたよくふせぐ」と注記している。「東山道戦記」は、「九月十四日には早朝より攻撃致すべしと各藩へ達し相成り候。その攻め口は、西の河原町口を日光街道および越後街道より入り候兵にてかかり、東の天寧寺口は勢至道より入る兵にてかかり、北方の敷口は東山道と海路(平湯上陸軍)との兵にてかかり、南一方はわざと攻めかからず候筈なり」と述べている。しかし、越後口軍の任務について「越後口軍監戦報」は、「越後口の軍は飯寺村に出張、すなはち、城外高

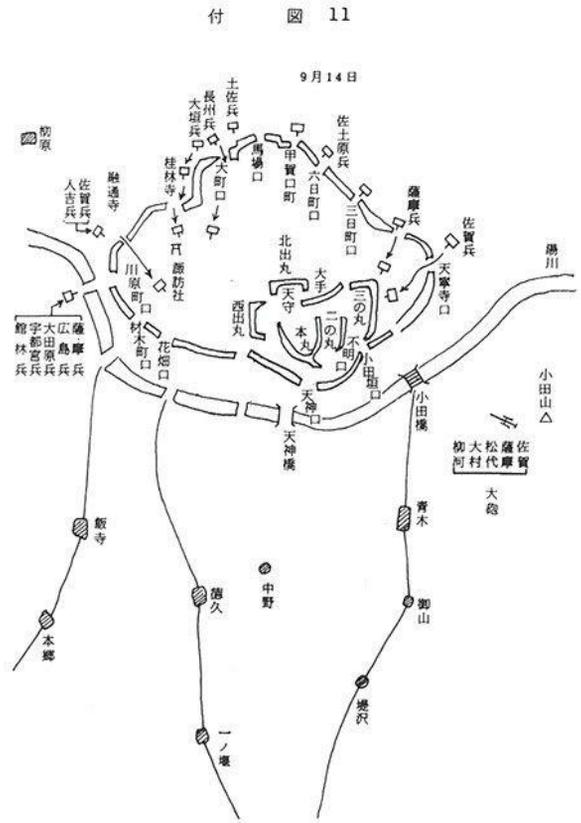
田の賊を防守致しおり候」と述べ、「戊辰征戦紀略(長州藩)も、「奇兵三・四番隊、振武三・四番隊、報国隊は若松城南の飯寺村を守り、高田口を防ぐ」と述べ、前記の「東山道戦記」と相連している。会津高田には会津軍の有力な野戦軍がいたことでもあり、越後口官軍はこれに備えて配置されたと考えられるであろう。

ロ、戦況

朝八時頃、諸口砲戦をはじむ。薩摩・肥前は東山(小田山)ならびに持口(攻撃地点)より烈しく大砲を乱射す。我が(土佐藩の)砲隊もまた、や、守地を進み砲撃す。(略)西南の官兵、すでに外郭に迫るにしが、小銃の聲は豆を炊るに似たり。ここにおいてか、長州・大垣の兵は軍議の如く桂林・融通両口より進撃す。賊もまた殊死して戦う。時に長州兵一小隊ばかり(が)我が持場(の)大町口に來たりて云う(には)、賊は要地によりて防戦するを以て、正面より当り難し(正面攻撃は困難である)。願わくは貴藩の固め場より進み、賊の横に出んと(土佐兵の陣地から突出して敵を側面攻撃したい)。すなはちだから土佐兵は(守地を開く。長州兵は進んで右に出て、諏訪社の左(即ち)賊の横を砲撃す。賊は大いに驚き、諏訪社をすて、敗走す。長・大垣の兵(が)にわかにこれを奪う(諏訪社を占領した)。西南諸口の賊(は)また皆、かえりみて潰走す。西南の外郭門はことごとく官兵の有となり、賊の往來を通すは僅かに東南の隅、天神口の一門のみ。東山の薩・肥の持場へは、朝來賊兵(が)襲來し、一時烈戦(したが)城西の戦いが始まるに及んで敗れて城に入る。終夜、薩・肥の持場は砲声やまず(山内家記)。

内容見本

(70%縮小)



■本書は類書の中で最も遅く刊行されたこともあり、著者が入手可能なあらゆる史料文献を駆使して各戦闘を比較対照・紹介している点が最大の特色です。

■佐賀藩は佐幕派との感情的対立も少なく、一方、最新兵器や技術を有する点では薩長土にも劣らなかつたため、戊辰戦をより客観的に見ることが出来たのかもしれない。

■色々な意味で、稀有の本として早くから復刻を待たれていましたが、私家本のため、時間の経過とともに関係者への連絡が難しく、復刻が遅れました。

●体裁 A5判上製貼箱入 630頁
●定価 一万二千元(税込・千別)
●予約特価 一万元(税・千共)
●特価締切 25年1月31日(厳守)
●発売開始 25年3月初旬

限定三百部(番号入)

▼書店不卸 ▼縮切厳守 ▼返本OK
●申込ハガキにある「三点セット特価」をご利用下さい。

周南市銀座二の二三
電話0975-834029
マツノ書店